

“しがじん”はみんなのねがいをつなげるために全国障害者問題研究会(全障研)滋賀支部が発行しています。障害のある人、障害のある人に関わる人たちみんなのつながりをつくり、広げていきたいという願いから生まれました。

しがじん

No.15
TakeFree
2018.5

全障研では、障害者や家族の願いを大切に、すべての人の発達を保障するための研究や調査活動を行っています。各地の取り組みを交流しつつ、一人ひとりが研究活動に主体的に参加しています。

あなたもぜひ、全障研にご入会ください。

詳しくは、下記までお問い合わせください。



Topics どの子ども育つ発達保障と地域づくり ～わたしたちが大切にしたいこと～

会員更新・新入会のおねがい

全障研の活動は、会員の会費(年会費 3,000 円)によって支えられています。ぜひ全障研会員になってください

会員更新・新入会の方法は、以下の通りです。

郵送の場合→「2018年度会費」と書いて120円切手25枚を同封し、
520-0052 大津市朝日が丘1-4-39 梅田ビル3階

人間発達研究所気付 全障研滋賀支部宛

までお送りください。折り返し、会員証を送らせていただきます。

mailの場合→件名に「全障研入会申し込み」とご記入の上「①お名前」「②「しがじん」などの送付先」「③所属など」をお知らせください。会費納入方法については改めて相談させていただきます。

2018年1月8日、大津市ふれあいプラザで、「これからの大津方式を考える学習会」を行いました。昨年に引き続き取り組みで、今回は、白石正久氏(龍谷大学教授)による講演「どの子ども育つ子育て・療育・保育をめざして～子育て・療育・保育を巡る現状と公の役割を考える～」のあと、シンポジウム「どの子ども育つ発達保障と地域づくり～わたしたちが大切にしたいこと～」と題したシンポジウムを行いました。今号では、このシンポジウムで報告された3つの報告を紹介します。

全障研滋賀支部へのお問い合わせは

n_hanako@zeus.eonet.ne.jp(事務局 能勢ゆかり)まで

全障研滋賀支部



保健師の立場から

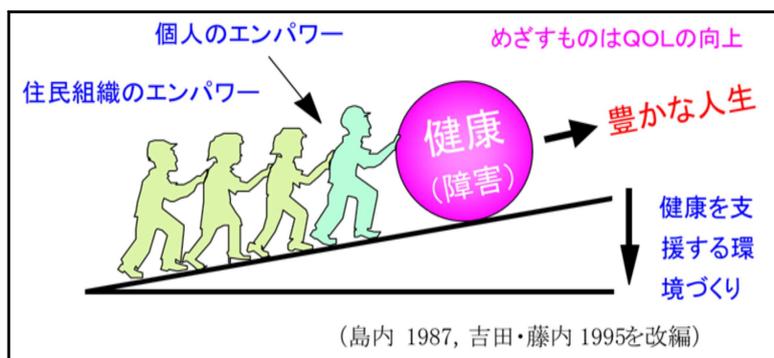
中すこやか相談所保健師 田邊さん

はじめまして。中すこやか相談所の田邊と申します。本日は15分程のお時間をいただき、4点から、地域での保健師の活動と、行政保健師としての強みや役割について皆様にお伝えできればと思います。

1. 保健師の活動ってどんなこと？

みなさん、保健師ってそもそもどんな活動をしているかイメージが湧きますか？

正直、私自身、専門性が見出しにくくてモヤモヤとした気持ちを抱いていました。それもそのはず。保健師はその町に暮らす人の日常の生活を下から支える役割。生活にさりげなく入り、上手く回りだしたらさりげなく抜けていく…何かがあるものすごく長けているわけではありませんし、直接サービスを提供するわけでもありません。言うならば裏方、影の存在、それが保健師だと私は思っています。



左図は、保健師の活動を紹介する中で、保健師がよく目にする図です。

1つ目に、ボールを押す青い人へのエンパワー、つまり、その方が抱えている不安や悩みなどを聴き、整理し、その人らしく生きるための自己決定をするお手伝いをします。2つ目に、住民組織へのエンパワー、つまりその人が持っている力を最大限活かしながら豊かな生活が回せるように、個と個を

つないだり、その人にとって必要な機関につないだりします。3つ目とし健康を支援する環境づくり。具体的には個々に聞いた情報を活かし、地域が今どんなことに困り、今どんなことを必要としているのかを明らかにし、その人の力だけでなく地域の様々な機関と連携して地域全体の力をつける地域づくりをしながら、その人らしく健康で楽しく生活できるための仕組みをつくっています。

2. 中エリアの子育て状況

その中で今回は私が所属している中すこやか相談所エリアの子育て状況や保健師としての具体的な活動をご紹介します。

① 子育て環境

中エリアは天津市のほぼ中央に位置し、交通の便がよく、この利便性を理由とした転入者が多いエリアです。マンションが多く、乳幼児のいる核家族世帯が多いです。長等・滋賀学区は子育て広場を行っている施設が山側に位置していることが多いのに対し、大型マンションは湖岸側に立ち並び、マンションの住民は交通手段がないため、車がなければ子育て広場を利用しにくい地域です。藤尾・山中比叡平学区は京都と隣接しており、生活圏は京都であることが多く、公園や子育て広場が少ない、乳幼児を遊ばせる場所が少ないという声をよく聞きます。

② 地域で出会う母親の姿

このような地域の中で、7年ぶりにすこやかに戻ってきて直接たくさんの方の母親の話を聴くようになりました。その中で私が感じたり思ったりしたことをお話します。

新生児訪問では育児不安の高い母親によく出会います。核家族で育児に自信が持てずにいることも多いです。育児でわからないことがあったときの情報をどこから得ているのかというと、最近はネットが増えてきました。特にタブレットやスマホが普及してからはよりいっそう感じます。ネットからの情報はあふれていて、その中から正しい情報の選択が難しいです。そうすると人から情報を得る機会が減ってしまい、同年代の子どもと会う機会も減ってしまいます。人付き合いが苦手な母親はさらにネットに頼る傾向にあります。天津の特徴として転入が多いので、知人がいなくて孤立していることも多いです。日中、母親と子どもだけで過ごす時間が多いと生活リズムを整える必要がなくて生活リズムが乱れやすかったり、子どものリズムに大人が引っ張られてリズムを整えにくい方にも出会

います。

③ 10 か月児健診からみえる親子の姿

次に 10 か月児健診からみえる親子の姿についてです。平成 17 年度と 27 年度生まれの、10 か月健診結果についての比較調査をしました。

まず食事についてです。

離乳食の回数を見ると、健診結果が継続群の方は 3 回食まで進んでいる割合が H 27 年度は 90 % とかなり高くなり、回数は進んでいることがわかりました。一方、離乳食の形態をみると、H 27 年度は健康群・継続群の両方がドロドロの形態の割合が増えています。このことから、この月齢になったら何回食、という情報はもっていますが、子どもの姿に応じて形態を進めたりすることができていないことがわかりました。

また、手づかみ食べについてですが、H 27 年度は健康群で「している」と答えた割合が、H 17 年度に比べて 15 % 減っており、「おやつのみ」が格段に増えています。この時期は子どもがこぼしながらも手づかみ食べに挑戦してほしい時期ですが、「何をどのようにあげたらよいかわからない」といった母の声をよくききます。このことから手づかみ食べが進んでいない現状がわかります。

家で楽しんでいる遊びについてですが、H 27 年度は「いないいないばあ」とだけ記載してある方が多かったです。一方、H 17 年度は「ぎったんぱたん」「ハイハイで追いかけて」といった「体をつかったあそび」の割合が最も高く、親子で一緒に関わった遊びが多かったことがわかりました。同じ「ボール」あそびについても、H 27 年度は単に「ボール」とだけ記載してあることが多かったのに対し、H 17 年度は「ボールを転がして追いかける」「ボール投げ」といった子どもがどのように遊んでいるのかわかるような記載が多かったです。母親からはよく「子どもと何をして遊んだらよいかわからない」といった声をききます。現在の方がたくさんの情報が簡単に手に入りやすくなってはいますが、今の時期にあった情報を選択し取り入れることは、情報がありすぎてかえって難しくなっていることがうかがえます。

大津市では 4 か月児健診が医療機関委託になっており、その後、電話での支援しかできず、10 か月児健診まで保健師が出会えない現状にあります。しかしその間は、離乳食が始まったり、運動発達が著しく発達する時期です。この乳児期の大事な時期に、孤立した母親にとって正しい情報が伝わらないことで不安なまま育児をしていることが課題であると感じていました。

3. 親子の姿から見えた課題への支援

そこで、これらの親子の姿からみえた課題をすこやかの中で整理し、支援の方法を検討して具体的な活動へと結びつけた一つの事例を紹介します。

まず課題から、中すこやかエリアの乳児をもつ親にどうなってほしいのかを検討しました。そこで 1 つ目に地域に出向ききっかけとなる場があること、2 つ目に乳児期の早い時期から相談できる場所を知り、育児支援者や地域とのつながりを持つことで不安が軽減できること、3 つ目に母親が子どもと関わることの楽しさを知る機会があること、と考えました。その具体的な場として、子育て支援センターと中すこやか相談所の共催で子育て広場『こあらっこ』を平成 29 年 1 月に始めました。先ほどお話しした地域の課題や 4 か月児健診後の継続支援がともしにくいこと、10 か月児健診での親子の姿などから、10 か月児健診までで支援の必要な 5 ～ 9 か月の乳児とその親を対象としました。目的は先ほどご



説明した、地域に出向ききっかけとなること、乳児期から育児の相談場所を知れること、子どもと関わる楽しさを知ることの 3 つです。

子育て支援センターでも乳児期の広場を毎月されていますが、自分から申し込んで参加できる母親ばかりではありません。広場を知らない方もいます。そんな方に少しでも、広場ってこんなことしてるんだ、遊びを覚えてもらえるんだ、今度近くの広場に行ってみようと思ってもらえるよう取り組んでいます。

ここからは、『こあらっこ』の実際の様子をいくつかご紹介します。

『こあらっこ』にこられているお子さんは寝返りがまだのことが多いです。保健師は『赤ちゃん体操』で母親に寝返り体操を伝えますが、いかにも指導！という硬い感じになりがちです。そこで子育て支援センターの先生の『いもむしごろごろ』の歌に合わせて自然に寝返り体操を伝えています。

写真1は、かご抱っこをして『大きな太鼓小さな太鼓』を歌いながら、ふれあいあそびをしているところです。そりの強い子は、抱っこがしづらく、姿勢が安定しなくてぐずるため、母親が困っていることが多いです。このふれあいあそびを通じて、母親が丸め抱きを知ったり、子ども同士が向き合ってお互いを意識したりできる機会としています。



写真 1

また、『いないいないばあ』などの絵本を一人ずつの子どもに向けて読み聞かせをしています。この時期から絵本の読み聞かせができることを伝えています。

『こあらっこ』に参加された後は、『こあらっこ』で出会ったスタッフが話しやすいと感じてもらえたのか、スタッフを求めて子育て支援センターに遊びにいられています。また、子育て支援センターに来ることに慣れて、定期的に利用されるようになって、その後遊ぶ友達をさらに求めて、住んでいる地域の広場に出向くようになっておられるようです。

4. 行政保健師としての役割

こうした活動を通して、行政保健師としての強みや役割について、私なりにまとめてみました。

保健師は日々の様々な活動を通して、直接市民の声をたくさん聴く機会があります。その声から一人の声だけでなく、地域の現状やデータをひろって地域の課題ととらえ、解決するための方法を考えます。

『こあらっこ』で言うならば、新生児訪問や健診などで育児が不安だったり自信がないといった声、10か月児健診の調査データなどから課題を整理し、解決する一つの方法として『こあらっこ』を立ち上げました。自ら教室に申し込んで参加したり、子育て広場に出向ける方もいます。しかし自分からお友達を求めて外へ出向くことが苦手な方や、一人で子育てに困っている母親もいます。そういった方たちに4か月児健診の結果を足がかりとして、身近な相談場所や地域の広場につながるために、10か月児健診よりももっと早くに関わることができないかと考え、実施しているところです。

『こあらっこ』を行うことで、乳児をもつ母親同士や地域の支援者とつながる契機となればと思っています。

また、この地域の課題をすこやかと子育て支援センターだけでなく、エリアの関係機関と共有することが大切であると考えています。天津市ではエリア毎に子育てネットワーク会議を設けています。今年度は、中エリア子育てネットワーク会議で課題を共有する機会をもちました。『こあらっこ』だけで、この地域の課題を解決できるとは考えていません。母親を取り巻く子育て関係機関それぞれが、日々支援していただいています。その中で、広場に参加する母親に「地域のみんなで子育てを応援するよ」「一緒に育てよう」と伝えていければと思っています。

はじめに保健師の活動として図を紹介しましたが、『こあらっこ』の活動で振り返ると、青いボールを押している人（乳児を持つ母親）が安心して育児できるという目標に向かって進むために、上る坂を下げる一つの環境づくりとして『こあらっこ』を立ち上げました。この『こあらっこ』を通じて母親同士をつなげたり、相談できる機関や支援者（背中を押してくれる人）に働きかけて応援者をつなげています。

私たちの活動は、数値として結果が出たり、即効性のあるものばかりではありません。しかしこうした市民の実態や声をひろって具体的な活動に生かし、市民が豊かな人生を送れるよう支援していくことが、行政保健師としての強みと役割であると思います。

今回、こういった保健師の活動を紹介する機会を与えていただき嬉しく思います。ご清聴ありがとうございました。

保育者の立場から

芹澤早由里さん、粟津英子さん

1. はじめに

私（粟津）は、これまで保育園→やまびこ→保育園→保育課と異動し、今保育園で代表保育士として4年目になります。これまで、やまびこや保育園で障害をもつ子どもたちや保護者の方にたくさん出会い、多くのことを学ばせてもらいました。保育園の障害児保育からは、障害のある子どもにとって価値や意味があるというだけでなく、クラスの保育そのものが高まり、まわりの子どもにとっても豊かな保育を展開することができるかと学びました。障害を持つ子どもも含め、多様な子どもがいることで、クラスの保育が一筋縄ではいかない難しさにぶつかるのですが、振り返ると、そのときこそ考えあうチャンスだったと思います。改めて一人ひとりの姿や発達課題に目を向けたとき、そして、それぞれの子どもが仲間の中で育ちあうことを願うとき、幅の広い保育を考える機会を得られるのだと思っています。

保育課時代には、保育相談や研修会等を担当したことで、各園を回らせてもらう機会を得ました。その中で、各園の先生方が大いに悩み工夫しながら、「仲間の中で一人ひとりを大切にしたい保育」「ともに育ちあう保育」といった、これまで大津の保育の中で大事にされてきたことが脈々と引き継がれていると実感することがたくさんありました。それは、各園で先輩から後輩へ直接伝えられていることもあれば、例えば長年続いている「障害児保育実践交流会」などを通して、他園での過去の実践からの教訓が大津市全体の保育の教訓として引き継がれていることもあるのだと思います。余談ですが、実践を記録し、語りあうということの意味は、そこにあると改めて感じるどころです。

しかしながら、中には、過去の実践が保育のやり方として、形だけが引き継がれているのではないかと感じることもあります。保育園の保育は、療育と違い年齢でひとくくりにみてしまう危険性があります。「〇歳はこんなこと」と形から入っていることはないでしょうか？

例えば4歳児で、鉄棒のいろいろな技に名前をつけて挑戦するという取り組み方は、多くの園でされているかと思います。これは、約15年前、芹澤先生と4歳児を担当した時に、いろいろなやり方を楽しむ中でどの子どもも手応えをつかんでほしい、それを仲間の中で認められて自信を持ってほしいと願って考えたことをきっかけにはじめたものです。その後の4歳児でも、その年ごとの子どもの姿に応じてアレンジしながら引き継いでいったもので、それが広がったのではないかと推測しています。自分たちのつくった保育が、後輩や次の世代に引き継がれていくのは嬉しいものです。ただ、この遊び方は、ともすると、前回りができるようになるためのステップ（ランク付け）のようになる可能性もあり、実践を引き継ぐとはどういうことなのかと、改めて考えさせられます。

今回は、この鉄棒の取り組みを事例に、当時の保育の意図と経過を振り返りながら、「保育をつなぐ」ということを改めて考えたいと思います。

2. 子どもの姿から出発する保育

はじめに、「子どもの姿から出発する保育～クラスの中で、それぞれの発達課題に合わせた取り組みを保障する～という視点で、鉄棒の取り組みを振り返ってみたいと思います。どのような取り組みだったか、芹澤先生に紹介していただきます。

15年前、粟津先生の他、2人の先生と4人で42人の4歳児のクラスを担当していました。重度の障害のある子が二人、家庭支援が必要な子どもや虐待家庭の子ども、認定は受けていませんでしたが発達障害の子など、丁寧な個別配慮が必要な子どもが多いクラスでした。集団が大きかったので、夏ごろまでは5歳児の力も借りながら、2グループに分けて生活し、遊びも別々に楽しむことが多かったのですが、それでも個性豊かな子どもたちは、「自分を見て」と信号を送ってくるが多く、トラブルや泣くことが絶えませんでした。

最近あまり実践していませんが、「4・5歳児の縦割りクラス」編成でした。このことについては語れば長くなりますのでサラリと流させていただきます。詳しくお知りになりたい方は、後ほど個別におたずねください。

4～6月頃の子どもたちは、3～4人の小さな群れで遊び、友だちを求めて遊ぶ姿は見られるのです

が、「イレテクレナイ」「カシテクレナイ」「カッテニ～シヤハル」などと訴えてきます。5歳児の真似をして遊び始めるのですが、遊びが長続きせず、目に入るものに次々あそびが移っていくため部屋は散らかるばかりといった様子で「継続して遊ぶ」「じっくりと遊ぶ」ことが課題でした。その時に先ほど紹介のあった鉄棒の取り組みが生まれました。

これは、他の研究会で事例紹介した内容になりますが、改めてご紹介します。

私たちは、半期ずつの大きな遊びの流れを計画し、長い期間をかけて「一人ひとりが自分に自信を持てるよう『誇れる技』を身につける保育」をすすめていこうと考えました。

・繰り返しあそび、少しずつ発展していくあそびを通して「ヤッテミタイナ」「デキルカナ、デキナイカモ」「ハズカシイナ」と内面を揺らしながら、自分で遊びを選び、遊びだす力や遊びこむ力をつけてほしい。

・友だちの姿を見て憧れたり、楽しそうな友だちの遊びに思いを寄せたりすることで群れる力をつけてほしい。そして、遊びを通して生まれた矛盾や社会性を力関係だけで解決するのではなく、話し合っ解決していくことを経験してほしい。

・一人ひとりの意見や、表現したことに価値があることを知らせてゆき、「アンナコトデイインダ」と安心して仲間の中で自分を出し、自分らしさに自信が持てるようにしたい。

と願い、「忍者ごっこ」と名付けていろいろな遊びに取り組みました。その修行の中の 하나가、鉄棒の取り組みです。

9月ごろ、一部の子どもたちの中では鉄棒が流行り始めました。しかし、全く寄り付かない子どもや、やってみたものの怖くてすぐにあきらめてしまう子どもが多く、遊びがなかなか広がっていきませんでした。困った保育士は「みんなの中で楽しく遊んでいることを披露する日」を設けました。

「忍者の修行」と名付けていたので、鉄棒だけでなく、竹ぼっくりで様々な道を歩いて見せること等も見せ合いました。

思いつきではありませんでしたが、ざっくりと次の2点だけは職員間で守ろうと決め、運動会までの間、何度か見せ合いました。

①「できること」ではなく、今挑戦していることを見せ合う。

②鉄棒の場合、技の中で、さらに子どもたちが微妙な違いを選ぶ。

(今その技のどこに力を入れて取り組んでいるのかを名前を付けることで周りの子どもたちがわかるようにしました。具体的には、見せる前にインタビューなどをし、一人ひとりの頑張りをみんなの中で認めえるようにしました)

子どもと一緒に名付けた技は、例えば…「お布団干し」は、鉄棒に二つ折れになってぶら下がるもので、鉄棒に体を添わせる基本の技です。「汗かきのお布団」「おしっこたれのお布団」のどちらかを選び、ぶら下がり方を変えます。「雀どまり」は、身体の硬さを利用したあそびで、足先まで緊張させピンと伸ばすことがポイントです。その他にも、「豚の丸焼き」、「おサル」、「時計回り」、「お尻まわり」、「足掛けまわり」、「前まわり」などがあります。

これが鉄棒の取り組みの始まりでした。この取り組みが、子どもたちにどのように浸透していったのかということがよくわかる例を紹介します。

Fちゃんは、自分に自信が持てず、友だちの鉄棒遊びを見ていてもなかなか手を伸ばしませんでした。夏頃より少しずつ自信をつけはじめ「難しいけれどやってみようかな」という姿を見せるようになったのですが、行きつ戻りつしている様子でした。身体が重く、支えてもらって「豚の丸焼き」をするのが精一杯で、できないと思って鉄棒に寄り付かなかったFちゃんですが、見せ合っこの後、取り組む姿が変わるようになりました。「豚の丸焼き」を、毎回「見て！」と自信たっぷりに見せるようになり、コツコツと練習し始めました。そして、「豚の丸焼き」を支えなしでできるようになり、違う技にも挑戦したそうだったので、「雀どまり」を保育者に勧められ新たな課題として取り組むようになりました。

この技を運動会で披露したFちゃん。おかあさんに「身体がピンと伸びていてかっこよかったね」と褒められたけれど、「今日のはあかんねん。先生に足を少し持ってもらったし」とFちゃんは意外な答えを返しました。Fちゃんなりの目標や目指す完成度があつたようでした。

また、両足に装具をつけて歩行していたTちゃんは、ちょうど運動あそびを始めた頃、「TはHちゃ

んのようにピョンピョンとべない」と、友だちとの違いに気づき自分のできなさを意識するようになっていました。Tちゃんに、できなさばかりがつのらないようにしたい、Tちゃんも他の子どもと同じように友だちに認められて自信をもってほしい、と願いましたが、子どもたちが前回りに憧れているような中では、単に「Tちゃんは自分の力でぶらさがるのが頑張っているよ」と伝えても本当の意味で認めるのは難しいと思いました。しかし、この鉄棒の取り組みでは、子どもたちの中に「前回りが一番すごい」というような価値観は生まれず、むしろ「雀どまり」を決めることに憧れたり、たくさんやり方に挑戦することが嬉しい、というような幅をみせました。「おサル」と名付けたぶらさがりも、他の技と同じようにみんなが挑戦するなかで、Tちゃんも友だちに認められ、運動会当日は「おサルします」と堂々とやって見せました。

4歳児の鉄棒の取り組みは、次年度以降もその時々の子どもの姿に応じた意図で引き継いでいきました。2年目のクラスは、できるかできないかの価値観が親子ともに強く、前回りができないとダメと、春から親子で夕方に特訓する姿がありました。失敗に敏感で、できそうにないことはしないという姿や、保育者の指示は素直に聞くけれど、自分からの発想が乏しく幅が狭いことが気になりました。前年度とはずいぶん違う子どもの姿だったのですが、前年度以上に子どもたちの「価値観の変換」は必要だと感じました。

子どもたちは、前年度の4歳児の姿を見て「あやめ(4歳児クラス)になったら忍者になる」と思っていたこともあって、忍者の取り組みを引き継ぎ、鉄棒は、自分たちで技を編み出す(命名する)ことにして、自分でいろいろ考えだすおもしろさを感じられるようにしました。また、みんなで失敗すること(失敗してもいいと思える)や、いろいろあることが面白いと思えることを他の取り組みでも大事にしました。

「○○ができるようになるにはどうしたらいいですか」と次々質問されるような固かった保護者の方が、4歳児の最後には、「これからも修行をつんで立派な忍者になってほしい」という言葉で締めくくられ、親子ともに価値観が変わったなど実感したのを覚えています。

4年目の時の子どもたちは、1年目と似ていて、群れて遊ぶのは好きだけど一人ひとは幼く、身体の使い方が不器用なため、特に運動あそびではなかなか手ごたえをつかめずウロウロ走り回っている子が多かったです。運動遊びにも何とか興味を持ち、何か一つでも手ごたえをつかんで自信を持ってほしいと願い、個々がしていることに命名して価値をつけて手応えにつなげるということを大事にしました。

いずれも、鉄棒はこういう形でしょう、と先に決めたのではなく、その時々の子どもの姿や課題を見たときに、今年もやっぱりこの遊び方で、でもここはアレンジした方が今年の子どもにはよいか、という考え方で進めていたと思います。

3. 保育をどうつないでいくか

次に、「保育をどうつないでいくか」という視点で振り返ってみます。

当時、縦割りだったこともあって、少なくとも4・5歳児担任間ではかなりはっきりと、4歳児の時期にこう育てほしい、こういうあそびを経験させたいということを経験して共有してしていました。あそび方など細かいことも具体的に共有していたのですが、それは単なる枠組ではなく、保育の意図や、なぜそうするのかといった視点で共有していたと思います。そこにどのような背景があったのか、芹澤先生からお話しいただきます。

先ほども紹介しましたが、4歳児42人、5歳児24人の縦割りクラスでした。

4・5歳の縦割りクラス編成を始めたばかりだったので、保育士はわからないことだらけ、迷うことだらけでした。生活は4・5歳で、遊びは4歳児クラス・5歳児クラスの年齢で過ごす為、遊びや生活の切れ目のタイミングの調整や、夕方、自分が担当していなかった場面を保護者に伝える必要があり、常に情報交換をしていました。

また、4歳児クラスだけでなく5歳児クラスにも配慮が必要な家庭が多く、当時は、主食の白いご飯を持参していましたが、そのチェックや連絡、登園を誘う連絡を入れ実際に迎えに行くなど、自分の担当だけでなく、大きく66人を把握し一緒に対応する必要がありました。活動を知らせ合うのではなく「なぜ～するのか」ということまでを伝えあっておかないと、年齢を超えて活動してしまうよう

なことがありました。そこで保育者は、4歳児と5歳児両方の発達を学び、互いの取り組みを尊重し応援し合うことを子どもと共にしていました。

4歳児は5歳児の姿にあこがれ、「ひまわりさんになったら～する」というあこがれがたくさんありました。また5歳児は生活を共にするため、自然と4歳児の世話を焼く姿があり、やってあげるばかりでなく「いつまでもそんなこと言って泣いてたらあかんわ」と意見を言う姿なども見られていきました。保育士は必要に迫られて話し合うことや連携をとることが習慣づいていきました。そして、個だけでなく集団を見る力もついていったように思います。

芹澤先生と組んでいた当時、私はTちゃんのいる方のクラスのチーフという立場だったのですが、自分だけでは、前回りにこだわらないという視点や、名前をつけることで一人ひとりの技を光らせるというような発想は生まれず、一律に取り組みさせてしんどい思いをさせていたかもしれません。

また、その後も取り組みを引き継いだ後輩として言うなら、4歳児でここは大事にしようということの前年度にみんなで共有していたので、自信を持ってそこをベースに保育を考えることができたと思います。そして、一人ひとりの子どもをみんなが把握し、保育者間でとにかく何でも共有しようという姿勢は、その後も脈々と引き継がれていたもので、あたり前のようにその時々の子どもの姿をみんなが共有し、どう保育するかを常に話し合っていました。多様な子ども集団、たてわりという保育形態、部屋がない状況など、保育の悩みはつきなかつたのですが、ああでもないこうでもないといういろいろ考えあうのは楽しく、安心して保育を進められたと思います。

先輩の立場から（芹澤）

この頃は正規職員の割合が多く、臨時職員もフルタイムで働いていたので、みんなで一緒に考えることが当たり前でした。すでに、朝の7時から夜の7時までの12時間の長時間保育は始まっていたので、時間がないことは今と変わらないのですが、ちょっとした時間を見つけて話し合ったり情報交換をしたりしていました。時間がない時は、聞いた人が次の人に伝えるという伝達方法も使っていましたが、それでも連絡漏れは起こり、「聞いてなかった」「話し忘れた」なんてトラブルはしょっちゅうで、それを堂々と言い合うことでストレスをためないようにしていたと思います。また、この頃より一クラスにいる障害児の人数が増え、3～5人いるというようなクラス編成に変わっていった頃でした。年長クラスでも担任が1～2人から増え、たくさんいることがありがたかったです。

担任は全て自分で頑張るのではなく、かと言って、全てを均等に平等にという事ではなく、得意分野をその人に任せながら互いに力を合わせるという保育のスタイルを作っていたころかなと思います。課題を抱える子どもも多かったのでちょっとした変化にも敏感で、「うれしかったこと」「つらかったこと」「腹が立ったこと」「驚いたこと」等話さずにはいられなかったし、いろんな事実を共有し共感できることが楽しかったなと思い出します。みんなで同じ方向を向いて協力し合わないと、立ち向かえない課題も多かったからかもしれません。

「保育はしんどい、けれど楽しい。それが保育。だからやめられない」。どんなに大変なことに出会い苦労したかが私たちの誇りと言ってしんどさを共有し、「あと一年たったら笑い合おうね」と言って保育をしていました。その頃は同僚性なんて言葉を私たちは知りませんでしたが、「良き同僚性の中で高め合うことができる職員集団」が保育を通して出来上がっていったのではないかと思います。

4. 最後に

改めて自分自身を振り返った時、自分は、直接お世話になった先輩方や、過去の実践の教訓から多くのことを学ばせてもらってきたと思います。

しかしながら、今、自分のおかれている立場で、それを後輩につなげられているかと問われると、かなり自信がありません。はじめに戻りますが、4歳児の鉄棒はこういう遊び方、〇歳児はこのあそびをするなどと、保育をスタイルとして継続したり共有したりすることは簡単で、ある意味安心感があるかもしれません。一方、一人ひとりの子どもの姿や発達課題を通して保育を作っていこうとすると、個々の保育士には様々な力量が求められ、保育者間では連携・共有する必要性が高まります。人手がない、時間がないということを言い訳にははいけないと思うのですが、今、その難しさにぶつかっています。

保護者の立場から



柴田照代さん

保護者の柴田照代と申します。どうぞよろしくお願いたします。

私の方からは、我が子の誕生から、大津市の発達支援との関わりのなかで障害を受容してきたこと、主に幼少期のことを中心に話をさせていただきます。

息子は、知的障害と自閉症スペクトラムを併せ持っており、現在、滋賀大学教育学部附属特別支援学校の中学3年生、15歳です。

予定日より2か月早く生まれ、体重が2,000gに満たない低出生体重児であったため、日赤のNICUにしばらく入院していました。

私自身は、二人目の子どもでもあり、上の子も順調に育っていたことから、下の子も発達は遅いながらも、順調に育っていくと信じて疑いませんでした。



上の子のときは、初めての子育てだったので、同じ月齢くらいのお子さんをもつ他のお母さんたちとしゃべれるということで、何度も赤ちゃん相談会に行かせてもらっていました。ですが、二人目なので、育児自体の不安があまりなく、そう何度も連れていかなくていいだろうと思っていました。ですが、毎回行く度に、「次も来てください」と声をかけられるのです。ちょっとめんどくさいなと思いながらも、未熟児だからまあいいか、という思いで通っていました。

ですが、息子は2歳の誕生日の前にやまびこ園に入園することになりました。はじめて、やまびこの話をしてもらった時の、その時の情景は今でも忘れられません。市の保健師さんや発達相談員さんがわざわざ家まで来てくださって…と恐縮していると、入園の話になりました。仕事に復帰して、上の子と同じ保育園に入れようと心づもりをしていたのに、何でうちの子がそこへ行かなあかんのや、もう帰って、と言いそうになりました。でも結局、育休を延長して、入園することにしました。



それは、すでに、日赤からの紹介でびわこ学園に理学療法に通い始めていたのですが、医療機関では我が子に必要なケアはしてくれ



ますが、当たり前ですが、そんなに時間をとってゆっくり話を聞いてもらうという感じではなかったこと、市の赤ちゃん相談会でずっとお世話になっていた先生方が勧めてくださったことで「やっぱりな」という腑に落ちる気持ちがあったからだと思います。親としては信じたくないけれど、ずっと我が子の成長を定期的に見てきてくださった方が、そこを勧めるにはきちんとした理由があるんだろうと思うことができました。

当時の育児記録を見直してみても、入園に際しての心配事を山ほど質問して、それに対して丁寧に答えてくださっていたり、事前見学も一緒に来てくださったりして、いろいろなことが相談しやすく、これから親子共々どうなっていくんだろうという、親の心配を一手に引き受けてくださっていました。だからこそ、それまで自分が描いていた、これからの生活を変えて、やまびこに入園できたのだと思います。

そして、実際に入園してみて、子どももちろん変わりましたが、自分がいちばん変わったと思います。それまでは、我が子だけを見て、障害があるのかないのかだけを考えていたのが、周りにお子さんやお母さんを見て、この子のそのままを見ていけばいいんだと思えるようになりました。すぐく抵抗のあった療育手帳も、入園した3か月後に取得しました。

やまびこは、息子に、家ではできないいろいろな体験をさせてくださり、親子通園で他のお母さん方と知り合うこともできました。そして何より、先生方がやさしく接してくださいました。

当時、息子は一人で気ままに動いてしまうし、たった 5 秒でも待つということができず、自分の思いが通らなかつたり、苦手なことがあるとパニックを起こしてしまうので、旅行はおろか、一緒に買い物にも行けませんでした。上の子がいるので、せめて外食でもと思うのですが、料理が出てくるまでが待てず、食べ終わるとじっとしてられずに泣き出して大騒ぎになってしまっていたので、まず店に入ると、さっと注文し、先に食べさせて、次に親のどちらかがさささっと食べて、二人で店の外に出て、後の二人が出てくるのを待つ、という団欒とは程遠いものでした。



ですから、本当にやまびこは私たち親子に心地よくて、そんな毎日の中で、息子の障害もゆるゆると受け止めていくことができました。

しかし、2年通わせていただいたやまびこも、卒園してしまう時がきます。うちは、地元の保育園を希望し入園することができました。上の子が満 1 歳から、別の園ですがお世話になっていたこともあり、保育園自体には慣れていたのですが、息子の入園にあたっては本当に緊張しました。上の子の時も、園に慣れることができるか、病気はしないか、とはじめはずいぶん心配しましたが、そのときとは比べようもない心配で

した。

やまびこは、集団生活と言ってもやはり境遇が似た方ばかりで安心でしたが、はじめて世間の荒波のなかに出ていくという感覚でした。我が子が障害をもっている親は、保育園の役員をした方が早く知り合いもできていいという話を聞くと、そうか頑張らないとなあとか、子どもは手がかかっても、せめて親は周りの方に好印象を与えないとなあとか、親の方はすごく肩に力が入っていました。

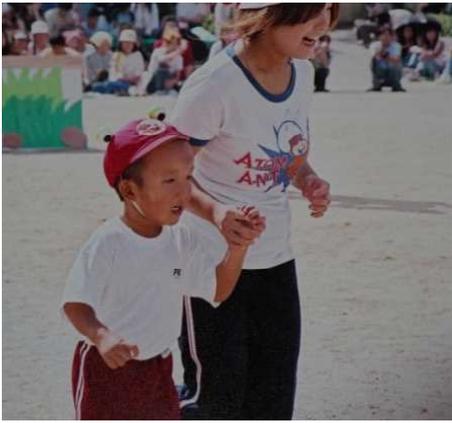
そんな親の気合いをよそに、やっぱり息子はやらかしてくれました。入園して3か月くらいたった頃、朝、登園して、自分の荷物の片づけもしないで、パッと目についたたくさんある赤ちゃんの人形を並べはじめました。すると、そばにいたお友だちが「貸して」と言って、何体か人形を持って行ってしまったのです。赤ちゃん人形を一人占めしたい息子は大泣き。自分だけのものじゃないと言い聞かせてもわかるはずもなく、こっちも怒ってしまい、「そんなんわからへんのやったら、もう家に帰るで！」と言って、息子の手をガッと引っ張って、教室から出て玄関に連れていきました。すると息子は、泣きながら玄関から走り出て、園庭で遊んでいた自分よりわざわざ小さい子を突き飛ばしたんです。その姿を見て、こちらも張りつめていたものが切れてしまい、園の玄関で、私はガーッと大泣きしてしまいました。



それまでの自分は、人前で泣くなんて考えられなかったのに、その時は恥も外聞もなく、号泣してしまいました。こんな小さい子を突き飛ばすような子を育ててしまうなんて、そんな子育てをしたはずはない、いったいこれはどういうこと、という気持ちでした。

大泣きしている息子に「もう園に来なくていい！」と叫んでいる子を聞きつけて、担任の先生が慌ててきて「お母さん、どうしたん」と声をかけてくださいました。事情を聞いた先生が、あっさりと「もういいし、お母さん帰って」と言われ、自分だけすずすご家に帰りました。

夕方迎えに行ったときには、息子はもういつも通りで、先生も「お母さん帰らはってからすぐ泣きやまはったで」「今日はこんなんできたで一」といつも通りに接してくださいました。



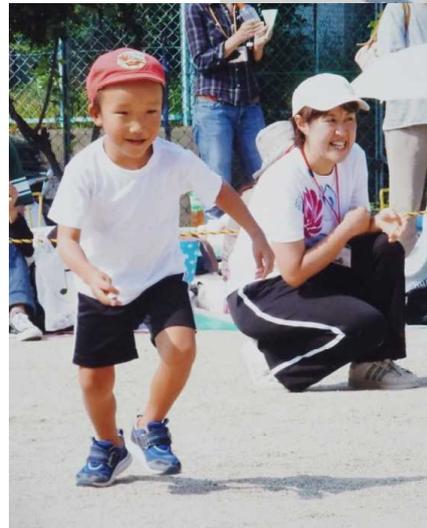
今から思うと、別のおもちゃを見せて本人の気を紛らわすとか、とりあえず抱っこしてその場を離れるとか、いくらでも方法があったらと思います。でもそれは、年を重ねてきているから言えることであって、やっぱりその時には必死だったんですね。その時の先生の対応が、私と一緒に悲しい顔をして、「お母さんも大変だよ」と共感する感じでもなく、あっさり「お母さん、帰って」って言ってくださったのが、とてもありがたかったです。これで一緒に悲しんでくださったなら、さらに落ち込んでいたと思います。大したことない、何泣いているの、という感じであっさり流してくださったので、立ち直れたんじゃないかなと思います。

その後も、園では本当に手厚く子どもを見ていただいて、何かをするときは先生と一緒にという姿から、だんだん友だちのサポートを受けて、友だちと一緒にという姿が見られるようになっていきました。

お世話になっていた発達相談の先生も定期的に来てくださって、子どもの成長をみていただきました。また、園には、さくらんぼ会という子どもの発達に悩みを抱える親の会があったり、保育園の垣根を越えて親同士がつながれる南風という南部の親の会があったりして、そこでお母さん同士や、先輩の保護者の方のお話が聞けたりして、本当にいい3年間を親子で過ごすことができました。

おかげで、小学校入学に際しては、あちこち見学に行かせてもらったものの、附属特別支援学校ということで、あまり悩まずに決めることができました。

附属特別支援学校に入学してから、京阪電車で、親子で登校するようになったのですが、保育園でお世話になった先生方や、市役所の方にお出会ったときには声をかけていただき、覚えていてくださるのだなと嬉



しく思っていました。

息子が幼かった頃は、子どもの発達について医療機関との関わりもありましたが、先ほども言いましたように、親の細かな悩みをゆっくり相談して…というわけにはいきません。子育てしていて何年もたつてくると、親も慣れてくるし、我が子はこんな子だなとわかってくるのですが、子育てのはじめの、ひょっとして障害があるかもと親が悩んでいる時期に、市の赤ちゃん相談会であったり、保育園であったりと、公正・中立な、何の利害関係もない立場で子どもをみてくださり、親に寄り添ってサポートしてくださるというのは、本当に信頼感や安心感がありました。悩みの渦中にいる親は、その時はたとえつらいことを言われても、その後の子育てのなかで振り返って、あの時ありがたかったな、あの支えがあったから、と思えるものです。今のよう



情報があふれ、いろいろな公的支援以外の発達支援サービスが出てくると、もちろん親が支援を選んでいけるというメリットはあるのですが、親はどれを選ぼうと悩むだろうし、私などは、耳触りのいいことを言ってくださる所を選ぶかもしれません。

我が家は公的支援を受けられて本当によかったと思いますし、これから子育てをされる親御さんにもぜひそのよさを感じてほしいと思っています。

おかげで息子は中3になり、春には高等部にあがることを楽しみに、元気に附属に通っています。ありがとうございました。



みんなのねがいを年間購読しませんか？

どこに生まれても、どんな障害があっても、いくつであっても、一人ひとりにあった保育・療育、教育、福祉や医療を保障したい。「みんなのねがい」は障害者の権利を守り、発達を保障するために、障害者の問題を見つめ、ともに考え、学びあってきました。

1冊650円ですが、「まとめ購読」などお得な購読方法もあります。事務局までお問い合わせください。年度途中からの購読も可能です。



滋賀支部の2018年度の活動予定

- | | |
|-------------------------------|------------------------|
| 5月20日(日)総会と学習会
講師 竹沢 清さん | 10月9, 23日(火)事務局会議 |
| 5月末 しがじん第15号発行 | 11月13, 27日(火)事務局会議 |
| 5月29日(火)事務局会議 | 12月1日(土)第2回学習講座 |
| 6月12, 26日(火)事務局会議 | 12月11日(火)事務局会議 |
| 7月7日(土)全障研埼玉大会に向けて
レポート検討会 | 12月中旬頃 しがじん第17号発行 |
| 7月下旬頃 しがじん第16号発行 | 2019年1月8, 22日(火)事務局会議 |
| 8月4-5日全障研埼玉大会 | 2月12, 26日(火)事務局会議 |
| 8月28日(火)事務局会議 | 2月24日(日)第3回学習講座 |
| 9月11, 25日(火)事務局会議 | 3月12, 26日(火)事務局会議 |
| 9月30日(日)第1回学習講座 | 3月23-24 研究プロジェクト |
| | 3月下旬頃 しがじん第18号発行 |

予定は予告なく変更する場合があります。

詳細は、滋賀支部ホームページをご覧ください。

学習講座などについては、改めてチラシなどで案内させていただきます。